

「渡りかけた橋」：嵐山渡月橋での連想

著者	田 禾
雑誌名	エコノフォーラム
号	27
ページ	66-66
発行年	2021-03
URL	http://hdl.handle.net/10236/00029397

2020年
12月8日
火曜日

先日、実に久しぶりで嵐山へ行った。人が想像していたよりはるかに多く、人で込み合う中に入り、紅葉を愛するのは少し危険だと感じた。その心境は、嵐山の「渡月橋」(とげつきょう)を見て、「渡りかけた橋」に立って思案するとも言えたいだろうか。あれこれ思案をめぐらせた結果、岸に座って川と山を眺めようと決めた。美しい風景と川を愛でる人々。君站在橋上看風景、看風景的人在樓上看你。(君が橋の上から風景を見ているとき、楼の上の人たちは君を見ている)中国の詩人・卜之琳のかの有名な詩が描写しているのもまさにこうした場面だ。人は無意識のうちに、他人の世界に入る、角度が変われば、自分自身が被観察体となる。絵を描く手法、建築学、社会学などの面からいろいろな解釈ができる。つまり、一つの素晴らしい文には、様々な知恵が凝縮

田 禾 教授(人文科学・中国語学)

「渡りかけた橋」 嵐山渡月橋での連想

されているわけだ。諺も然り。個人的には「月夜に提灯」が好きだ。余計なことだと頭では分かっているものの、時にはそうした気持ちになることもある。中国語では「画蛇添足」に相当する。「蛇足」という語は、この成語から来ている。同じ学部の梶井先生が書かれた『故事成語でわかる経済学のキーワード』では、蛇足の話しの背景を掘り下げ、経済学の角度から解釈を行い、「賢く行動するためには、追加的な出入りを考えるべきだから、まずは自分の置かれている状態を把握し、そこから追加的な便益と、そのためにかかる追加的な費用を比較しなさい」ということになるだろうか。本書では全部で28個の故事成語を選び、就中、特に惹きつけられたのは「朝三暮四」に関することだ。

「朝三暮四」は、『莊子・齊物論』に初めて登場し、莊子は「斉物」つまり事の一致性を強調し、「区別」の存在は人の主観的な理解より生まれたという観点を持っている。そして実質的な中身は同じなのに、外見の違いだけで一喜一憂することは実に無意味だと指摘している。列子でのポイントには世の中には猿を騙すような聡明な人もいるし、形に騙されて実質の中身を弁別できない愚か者もいるという点だ。梶井先生の本では、「フレミング効果」という経済学の重要な戦略までも導き出し、「同様な事柄の記述方法を変えただけで、人の選択行動に影響を及ぼすのである」と説明されている。そして「消費者理論」の立場からも説明を加えている。

故事成語は時代とともに、その意味も変化していく。「朝三暮四」という成語は、現在、中国では「常に変わる」という意味に重点が置かれ、さらに拡大していき「よく噂する」という意味になった。また、外来語として、言葉の意味合いは同じではない時もある。例えば日本語の「一族」が中国語に入ると、新しい外来語としてマイナス的の意味が捨象され、単純に中性的な「人々」という意味となった。「工薪族」「出勤する人々」ということで、「サラリーマン」を指す。

今年度の授業はほぼオンラインで行っているのですが、私たちはさしずめ「オンライン族」ということになるのかもしれない。「朝三暮四」の生計のため頑張ると同時に、たまには月の下でライトアップされた渡月橋を渡るのも一興かと。